

# 邪馬台国論

## 3章 國名と国家形態

### 女王國は連合国家

# 生口とは小工

魏志倭人伝には「生口」という不明な言葉がある。この言葉は「倭國」の不思議な風習についての記述の中に初出し、以後三カ所に登場する。

- (1) 其行來渡海詣中國、恒使一人、不梳頭、不去蟻蝨、衣服垢汚、不食肉、不近婦人、如喪人。名之爲持衰。若行者吉善、共顧其生口財物、若有疾病、遭暴害、便欲殺之。謂其持衰不謹。

その行來・渡海、中國に詣るには、恒に一人をして頭を梳らず、蟻蝨を去らず、衣服垢汚、肉を食わず、婦人を近づけず、喪人の如くせしむ。これを名づけて持衰と爲す。もし行く者吉善なれば、共にその生口・財物を顧し、もし、疾病あり、暴害に遇えば、便ちこれを殺さんとす。その持衰謹まずといえはなり。  
(「魏志倭人伝」 石原道博訳 岩波文庫)

石原氏の訳は以上の如くであるが、冒頭、「其行來渡海詣中國」の意味が不明瞭である。「其行來」と「往來(來往)」と同じではない。「往來」は「行き來する」という意味の動詞である。

「其行來」とは何か。「其行來渡海詣中國」に於ける「渡海」は「海を渡る」である。すると「海を渡る」の主語は何かということになる。この文は「其行來渡海詣中國」で始まる文である。故に「渡海」の主語は「其行來」の中にある。「其」は「その」であるから主語ではない。「來」は「來る」という動詞である。残るは「行」である。

「行」とは古代の軍制で、兵士二十五人をいう(旺文社漢和辞典)。「行」とは現在の言葉でいうと「一行」に近いであろう。だが、彼らは武装していた。当然である。文中に「暴害」とあるように、どこで誰が襲ってくるかわからない不安な旅である。だから、魏志倭人伝は武装していた一行を、「軍」の意味で「行」と表記したのである。「行」が主語である。

#### ・其行來渡海詣中國

「其行・來・渡・海・詣・中國」と訓む。「その行、來たり。海を渡り、中國に詣る」と訓む。

#### ・恒使一人

「使」は使節である。「恒に使節の一人は」と訓む。

#### ・若行者吉善、共顧其生口財物、若有疾病

難解である。「若」は「もし…だとすれば」という意である。「者」は「ば、れば」という語調を強めるための助詞である。つまり「若…者」は一種の仮定の構文といえよう。従って「若行者吉善」は「若・行・者・吉善」と切り、「もし一行が吉善であるならば」と訓む。

「顧」がまた難解である。現代日本語にぴったりの言葉がない。辞書の意味では「目をかける。慈しむ」であろうか。

- (2) 其年十二月、詔書報倭女王曰。制詔親魏倭王卑彌呼。帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米・次使都市牛利、奉汝所獻男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈、以到。汝所在踰遠、乃遣使貢獻、是

汝之忠孝、我甚哀汝。今以汝爲親魏倭王、假金印紫綬、裝封帶方太守假授。汝、其綏撫種人、勉爲孝順。

其の年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く。

親魏倭王卑彌呼に制詔す。帶方の太守劉夏、使を遣わし汝の大夫難升米・次使都市牛利を送り、汝獻ずる所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉り以て到る。汝がある所踰かに遠きも、乃ち使を遣わして貢獻す。是汝の忠孝、我れ甚だ汝を哀れむ。今汝を以て親魏倭王と爲し、金印紫綬を假し、裝封して帶方の太守に付し假授せしむ。汝、其れ種人を綏撫し、勉めて孝順を爲せ。(同)

「種人」とは「種族」と同意であろう。「綏」は「安んじる」、「撫」は「いたわる」である。

- (3) 其四年、倭王復遣使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人、上獻生口・倭錦・絳青縑・緜衣・丹・木(犬付)・短弓矢。掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬。

其の四年、倭王、復使大夫伊聲耆・掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・緜衣・丹・木(犬付)・短弓矢を上獻す。掖邪狗等、率善中郎將印綬を壹拜す。(同)

「使大夫」は官名であろう。主語は倭王、述語は「遣」、目的語は「使大夫伊聲耆、掖邪狗等八人」である。

- (4) 壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還。因詣臺、獻上男女生口三十人、貢白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十四匹。

壹與、倭の大夫率善中郎將掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。因って臺に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十四匹を貢す。(同)

「倭大夫」は官名であろう。「政」とは帶方郡の武官「張政」で、肩書は塞曹掾史と伝えられる。その政が帰国するとき、壹與は、「倭大夫・率善中郎將」の「掖邪狗」を長官として、二十人で政を送り届けさせた。彼らは「臺(洛陽の中央官庁)」まで行った。その時、男女生口三十人、貢白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十四匹を献上した。

## 生口は奴隸ではない

「生口」とは何か、諸説がある。

中山(平)博士は日本の留学生、橋本博士は倭人の捕魚者、波多野氏・沼田博士は捕虜とした。市村博士は唐以前では人間・奴婢・奴隸、以後では動物の意で、ここでは奴隸とされた。いわゆる生口論争は、はしなくも奴隸・捕虜、財産所有形態、生産技術などの諸問題へ展開した。

(注・魏志倭人伝・石原道博訳 岩波文庫)

生口の候補は「留学生」、「捕魚者」、「捕虜」、「奴隸」である。一般的には、奴隸であると解されることが多い。

これは宗教的、或いは民俗学的にみると非常におもしろいと思いますが、ここに生口という者が出てきます。これはおそらく奴隸的な者です。奴隸階級というほど多くはいなかったようですが、若干の奴隸が存在したということがこの史料からわかります。生口の史料はほかにもいろいろありまして、卑弥呼の第一回の魏への使者は、男女生口あわせて10人を連れていっています。

(「邪馬台国と卑弥呼」直木孝次郎・吉川弘文館)

倭國の女王は、真珠や木綿と共に「奴隸」を中国の皇帝に献上した。いかにも映画のワンシーンに登場しそうである。しかし、もし、「奴隸」ならば、受け取った魏の皇帝は困惑したにちがいない。

奴隸を何に使うか。むろん王宮の様々な仕事はすべて一流の専門職が担っている。倭國から来た奴隸に

できるような仕事ではない。また王宮内のどんな仕事も奴隷に任すような不用心なことはしなかったであろう。王宮内で奴隷に任す仕事などない。だからといって外に放り出すわけにもいかない。言葉も分からない他国の奴隷が生きていけるほど甘くはない。

倭國の女王卑弥呼は中国魏の皇帝が奴隷献上を喜ぶと思ったであろうか。恐らく、そうは思わなかったであろう。

魏皇帝に何を献上しようか。贈り物は倭國で最も高価なものでなければならない。  
我が国の特産品で最も貴重な物を選び献上しよう。

奴隷説はありそうで、最もあり得ない想定である。では、留学生はどうか。魏志倭人伝は献上と書いている。献上するのに留学生はないであろう。「留学生をお願いします」と云うのだったら分からないことはない。だが、「差し上げます」というのに、世話の焼ける留学生をどうぞ、と云ったら皇帝は怒ると思われる。

景書二年の十二月に魏皇帝は卑弥呼に親書を送り、卑弥呼を「親魏倭王卑弥呼」と呼んでいる。その文書は魏皇帝の信愛の情にあふれている。

汝がある所踰かに遠きも、乃ち使を遣わして貢獻す。是汝の忠孝、我れ甚だ汝を哀れむ。今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を仮し、裝封して帶方の太守に付し假授せしむ。汝、其れ種人を綏撫し、勉めて孝順を為せ。

これだけではない。魏皇帝は卑弥呼だけに特に贈り物をしている。この贈り物は卑弥呼の「好物」として女性の喜ぶものを贈っている。

また、特に汝に紺地句文錦三匹・細班華ケイ五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各々五十斤を賜い、皆裝封して難升米・牛利に付す。還り到らば録受し、悉く以て汝が國中の人に示し、國家汝を哀れむを知らしむべし。故に鄭重に汝に好物を賜うなり。

## 「生口」 解明

- (1) 献上された物は「布」「弓矢」「珠」などの工芸品である。これらの工芸品は倭國にとっては貴重品だったと思われる。いわば、倭國第一級の財物である。故、魏皇帝への献上品とされたのである。
- (2) 「財物」と「生口」は単独で献上されていない。「人と物」のセットで献上されている。基本的には「生口」が主で、「物」が従の順序である。「生口」に重きを置いている順序である。
  - (a) 生口財物
  - (b) 男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈
  - (c) 生口・倭錦・絳青縑・緜衣・丹・木(犬付)・短弓矢
  - (d) 男女生口三十人、貢白珠五千孔、青大句珠二枚、異文雜錦二十四
- (3) 「生口」-「財物」が必ず併記されている。ということは、「生口」と「財物」の間に何か関係があることを示している。では、どのような関係性が存在するのか。「生口」と財物を列記してみよう。

- ・生口-班布
- ・生口-倭錦
- ・生口-絳青縑
- ・生口-緜衣
- ・生口-短弓矢

- ・生口－白珠
- ・生口－青大句珠
- ・生口－異文雜錦

「生口」の解明はこの関係性を解明することにある。では、最初の「生口」－「班布」を取り上げて、従来「生口」として想定されている、「留学生」「捕魚者」「捕虜」「奴隸」を当てはめてみよう。

- ・留学生－班布
- ・捕魚者－班布
- ・捕虜－班布
- ・奴隸－班布

これら「生口」と考えられている人物像と班布の間にはいかなる関係も存在しない。これらの人物像と班布との間に関係性がないということは「生口」はこのような人物ではない。ではもう一つ「生口」－「白珠」はどうか。

- ・留学生－白珠
- ・捕魚者－白珠
- ・捕虜－白珠
- ・奴隸－白珠

この関係に何か意味を見いだすことができるか。恐らく誰にも二つの間に関係を見つけることはできないであろう。「生口」はこのような人物ではない。今まで「生口」として想定されてきた人物にはまともな関係性はない。

(4) 生口－班布・生口－白珠・生口－倭錦等々に存在する関係とは何か。その関係を見つけるのはそれほど難しいことではない。普通の判断で十分である。

- ・生口－班布……………織人－班布
- ・生口－倭錦……………織人－倭錦
- ・生口－絳青縑……………
- ・生口－縣衣……………織人－縣衣
- ・生口－短弓矢……………弓職人－短弓矢
- ・生口－白珠……………真珠職人－真珠
- ・生口－青大句珠……………珠職人－青大句珠
- ・生口－異文雜錦……………織人－異文雜錦

「生口」と「財物」、この二つの間の関係性は、一般的に言えば、工芸技能工－工芸品である。卑弥呼は倭國の工芸品を魏皇帝に献上した。工芸品は倭國の優れた第二次産業であった。その際、これらの工芸品を作った技能工を、「この者たちがこれを作成しました」と遣わしたのである。いや、「生口」－「物」の順序で記載されていることを考慮すれば、倭國の使節はこのように云ったであろう。

この者たちを紹介します。これらの者は我が国の優れた技能工です。ご覧ください。こんなすてきなものを制作しました。皇帝にお仕えするために参りました。

(5) 「生口」とは倭國の超一流の技能、技術を持った職人、織人だった。班布を献上するためにそれを織った男性の織人四人、女性の織女六人が同行した。また、「真珠」「異文雜錦二十匹」にはそれらの工芸品を作った真珠工芸技能工や織人・織女が同行した。その数三十人となった。

魏の皇帝には世界各国から様々な献上品が届けられていたであろう。その中で卑弥呼の贈り物が特に高価な物だったということではないであろう。しかし、卑弥呼は倭國の貴重な特産品を献上しただけでなく、それを制作した技術者、技能者も一緒に遣わしたのである。これは現代風に考えれば、例えば、自動車を贈る。その際、自動車を製造する工場を建設し、また、製造技術者も派遣したということである。魏の皇帝は卑弥呼の思いに感動したであろう。「親魏倭王」という称号はその返礼である。

倭人伝は卑弥呼が生口を「献上」したと書いている。ゆえにそのイメージは奴隷的で、人格が認められない存在といったものが想起されるのかもしれない。しかし、「生口」とは奴隷ではない。立派な技術者、技能者である。卑弥呼は魏の皇帝に贈り物をしようと考えた時、倭國の工芸品に決めた。そして、その工芸品の制作技術者に、「魏に渡り、皇帝に仕えよ」と、いわば、海外への転勤を命じたのである。魏の皇帝に仕えることは名誉なことである。彼らは勇躍世界の先進国、魏に渡ったのである。

卑弥呼が贈った工芸品はどのようなものだったのか。その一部は私たちの目の前にある。卑弥呼の都は八女市にあった。八女には歴史資料館がある。そこに卑弥呼が皇帝に贈った工芸品がある。

## 卑弥呼の都は八女、八女の工芸品

(1) 魏志倭人伝に記載された「倭國」とは八女を都とした二十一カ国の連邦であった。卑弥呼の献上品はこれらの国々の特産品だったのである。その品々はどのようなものだったか。

卑弥呼は八女に住んでいた。八女は八女丘陵の古墳群で名高い。その古墳から多くの工芸品が出土している

卑弥呼が魏皇帝に献上した品々はどのようなものであったか、幸い、今、私たちは確かめることができる。岩戸山歴史資料館(2016年に閉館)にそれらの工芸品が展示されている。写真は黄金のイヤリングと短弓である。卑弥呼もこのようなイヤリングを付けていたのであるか。





- (2) これらの工芸品の存在はそれらを作成した工芸技術者・技能者の存在を前提とする。「布」は残っていないが、魏皇帝には「班布」「倭錦・絳青縑・緜衣」等の織物が献上されていた。「金銀加工」「織布」「武器製造」「真珠加工」はそれぞれの技術者が製造を担当していたと思われる。当時の倭國では既に分業だったのである。

## 生口の読みと意味

- (1) 「生口」とは技術者・技能者であった。では、何故、倭人伝は、「生口」という意味不明瞭な言葉で書き記したのであろうか。倭國の王は、中国古代王朝「呉」の王の一族だった。当然、その言語は「呉語」を色濃く引き継いでいた。では、倭人伝が書いた、「生口」の本来の読みは何だったのであろうか。「生」は呉音では「ショウ」である。「口」は呉音では「ク」である。倭人は「生口」を「ショウク」と発音していたと考えられる。「生口」は中国側(魏)の漢字表記である。

では、倭國では「ショウク」はどのような「呉字」で表記されていたのであろうか。「ショウ」は「小」で、「ク」は「工」であろう。「ショウク」と「小工」である。「工」は「技術者」の意である。細かな細工をする技能工という意味で、「小工」と云ったのであろう。

「小工」は現在では使用されていないが、「小工」の対となる言葉は現在でも使用されている。「大工(ダイク)」である。倭國には、「大工」「小工」が居た。家など大型建造物は「大工」が担い、身につける衣服や飾り、或いは短弓などの武器製造は「小工」が担った。

倭國ではこれらの技能工を「大工(ダイク)」「小工(ショウク)」と云った。そして、魏志倭人伝・作家陳寿は「ショウク」を聞いて、「生口」という漢字を使った。本来は「小工」と表記すべきであった。

- (2) 「生口」とは奴隸とは全く異なる人物である。当時の倭國の最高工芸品を作った倭國の誇る技術・技能者であった。倭國は国家最高の贈り物として、倭國工芸技能者を派遣した。そして、彼等もまた、誇りを胸に魏皇帝の前に立ったのである。



(いずれも、「岩戸山歴史資料館」所蔵)